

## 2018年3月期第2四半期 決算説明会 質疑応答要旨

日時：2018年11月29日（木） 10時00分～ 場所：ベルサール八重洲（東京都中央区）

出席者：代表取締役社長 根本弘、常務取締役 大上誠一郎、取締役 栢森啓、取締役 大成俊文

Q1

パチスロ6号機が2機種市場投入されが、出だしの状況及び今後の見通しについて教えてください。

A1

一部の機種は非常に良い成績で稼動しております。ただそれ以外の機種の立ち上がりはあまり思わしくありません。しかし、遊技機メーカーの開発現場では、あまり悲観的な意見は出ておらず、まだまだできる事、やりたい事がたくさんあるという話を聞いています。来年から何かきっかけにファンに受け入れられる機種が出てくると考えております。

Q2

2019年2月からパチンコ機における確率変動等の継続率を上限65%までとする規定を撤廃したという規制緩和がありますが、市場活性効果を期待できるのかどうかを教えてください。

A2

継続率65%の撤廃についてですが、確かに継続率自体は撤廃されましたが、「出玉の枠」そのものは変わっておりません。遊技終了時の持玉数を見ると、今までより若干減っているなという印象を持つ遊技者が多くなると考えております。ただ、大当り中の出玉のドキドキ感（射幸性）という部分では、少ない出玉ですが大当りが頻繁に続くことで、今までより当たった人は楽しんでいただけたらと思っております。

あとはここに新たに登場したパチンコ機の「設定」をどう組み合わせたいけるかによって遊技機の幅が広がり、上手いけばパチンコ業界はまだまだ盛り返して行けると思っております。

Q3

上期は増益ですが、その要因は販管費（研究開発費を含む）の抑制の結果のように見えます。通期でも期初計画と比較すると販管費（研究開発費を含む）はあまり使用しないという見通しでしょうか。

A3

研究開発費やその他販管費は単に使用しなかったということではなく、上期から下期に発生がずれたという状況です。市場における遊技機の変化により、変化に合わせてデータ分析の仕方を変更する必要があります。当社はそのための開発投資は常に掛けなければならない費用と認識しております。

Q4

ホールの売上高の推移の表では、8・9 月が久しぶりに前年比増となっていますが、この実績をどのように見えていますか。

A4

当社の DK-SIS データでも数年ぶりに 7・8・9 月のパチンコの業績は前期同月比を上回りました。ここで底を打って上がったというイメージになるかもしれませんが、この 3 ヶ月はたまたまパチンコで新内規の遊技機ではないのですが、各遊技機メーカーから主力の人気機種が市場で大量導入されたため、パチンコの稼動が押し上げられ、前年同月を上回りました。

しかし、10・11 月と稼動は非常に厳しい数字となっており、業界自体が上向いたと捉えるのは危険であると考えております。

Q5

業界が衰退していく方向が少し見えている中で、異業種へのチャレンジが今ひとつ遅いのではないかなと考えていますが、その辺りの説明をいただけますか。

A5

昨年から新たに専門の部署を作って新規事業の創出に取り組んでおり、その他に 5 年先 10 年先を見据えたプロジェクトも立ち上げている状況です。業績に係るくらいの異業種参入を皆様にご案内したいのですが、なかなかまだまだそこまで行っていない状況です。

Q6

CR ユニット「ベガシア」に関して、上期は計画・前年に対して共にマイナスですが、先ほど新しいサービスも含めて受注増を期待するという話がありましたので、その新しいサービスの内容も含めて下期巻き返す見通しについてコメントをください。

A6

CR ユニット「ベガシアⅢ」に標準搭載しております顔認証というシステムですが、今まではマーケットデータや遊技機の活用という部分で提案してまいりましたが、この秋からセキュリティを強化した提案をしております。多くのホール様で非常に反応が良く、現状の新規出店が無い中、既存店におけるリプレースに期待が持てると思っております。

Q7

来年 10 月に今度こそ消費増税がありそうですが、外税への対応がそれを機に加速していった入替需要のようなものが出てくるのかということについてお話しください。

A7

来年の消費増税に関しては、現在の 8%と比較するとプラス 2%なので、そこだけを捉えるとホール様の多くが外税導入の為の設備投資に動くというのは少し疑念があります。ただし、外税導入を議論するきっかけにはなると考えております。

以上